教育実践

スポーツ観の自己形成を求めて

サッカーの戦略・戦術指導

吉田　文久
（名古屋短期大学）

はじめに

「大学の体育の先生は楽でいいですね。」と、ある研究会の席で、小学校の先生だったと思いますが、発言されたのを聞いたことがあります。これは、その先生が大学で受講した体育実技の授業を回想しての発言か、知りえる大学の体育の教員の実態に基づくものなのか判断はつきませんが、ひょっとすると、大学内部の他分野の先生方もこのような意識を持たれているのではないかと思われます。

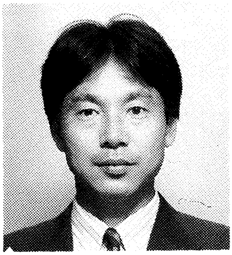
息抜きや気晴らしの程度で良しとするような体育実技の授業が展開されているとするならば、今、「保健体育」が迎えている危機的な状況は、自らの手で作り出したものであると考えられます。そうするならば、先の小学校の先生の発言は、大学において学ぶのにふさわしい内容を持った授業実践が、今まで展開され蓄積されてこなかったことへの指摘と受け止めなければなりません。

ところでこの実践は、数年来、非常勤として勤務している日本福祉大学での昨年のサッカーの授業です。本来なら

ば、本務校の実践を紹介すべきところですが、全国的にも珍しい年間一教材（種目）に取り組むという、体育の授業実践を紹介させていただくことにしました。

スポーツ観の自己形成を

大学体育の目的・目標は、それぞれの大学、あるいは個人レベルで設定し、それに基づく実践がなされています。



よしだ・のりひさ●一九五六年、大阪生まれ●千葉県の高校教諭を四年半勤務後、一九八六年九月より名古屋短期大学へ●専攻は体育教育学●主な論文に「女子学生による体育運動の教材評価」「体育の授業における生徒の学習行動について」（名古屋短期大学紀要）など●競技歴は、小、中、高、大とサッカー部に所属、輝かしい戦歴なし。現在、名古屋短期大学サッカー部監督。指導に励むものの その成果はいまだあらわれず。プロリーグ発足がもう少し早ければ、人生もかわったかと言っても、戯言と相手にされない。忙しさのため審判活動も小休止。サッカーがどんどん遠のいていくようで、寂しい限り。

私は、それを「スポーツ観の自己形成」とし、スポーツ種目の学習を通して、スポーツについての理解を深め、今までのスポーツ経験を土台として、自らのスポーツに対する見方や考え方を形成する場としたいと考えています。

この「観」の形成については、「教育内容という建物の中で、〈術〉は土台に、〈学〉は柱に、〈観〉は屋根に相当する」と言う遠山啓の見解に基づき、少々乱暴かもしれませんが、それぞれ語頭にスポーツをつけて、「スポーツ技術」を土台とし、研究が蓄積されている「スポーツ学」を支える諸科学を柱としながら、「スポーツ観」の形成をめざしたいというものです。

息抜きや気晴らしはもとより、単に技術の習得や技能の習熟だけでない、スポーツをトータルに学習する授業づくりをめざしたいという思いです。

なぜ戦略・戦術なのか

「戦略・戦術」を取り上げる意味は、二つあります。一つは、スポーツに内在する「競争」を授業の中に積極的に位置づけるということです。城丸章夫も指摘するように、熾烈な受験戦争の中をかい潜ってきた学生たちは、「競争」に対して、勝敗の結果を人間の人格上のねうちにかか

わるような理解に結び付ける傾向にあり、スポーツにおける競争と実人生における資本主義的競争とを同一視しがちです。だからこそ、スポーツにおける競争と実人生における競争を区別し、一等になって喜ぶだけでなく、ビリで走っても面白いということを教えなければなりません。勝ちも負けもともに楽しむことができるということが知的な理解として確立され、他と競争することによって自分がベストを尽くし、進歩を確認することができる愉快さを学ばせなければならないということです。

スポーツにおいて競争という知的活動に取り組むために、元来、軍事用語であり、スポーツ競争理論を支える「戦略・戦術」、そして「作戦」に着目することが必要になってくるわけです。

もう一つは、従来の球技指導のあり方への問い直しです。「球技指導では何で評価するのか」ということが問われたときに、例えば、サッカー指導では多くの場合、「ボールコントロールがうまい」とか「ボールを強く遠くに蹴ることができる」など個人的な技能の習熟に焦点があてられ、さらに授業における態度（個人的・集団的）が加えられるといったのが、実情であるように推察されます。真に「サッカーがわかり、できる」というのは、そういう個人的な技能だけにとどまらず、その局面でどのようなプレーを選択すべきなのかの状況判断ができ、チームの一員として他のメンバーとともにその試合の戦い方や目標達成のための一定期間の活動を組織することができるというところまで含まれると考えます。これが「戦術」「戦略」なのです。ゲーム中心の授業をしつつも、その中でなに学んだのかが明確にされる必要があり、従来球技指導において教えるべき内容（教育内容）としてあまり扱われてこなかった「戦略・戦術」を位置づけようというわけです。

戦略・戦術指導に入る前に――前提的考察――

戦略・戦術とは

体育の授業で戦略・戦術を教えると言っても、「戦略とは何か」「戦術とはなにか」そして「作戦とはなにか」ということが明確にされていなければ、それを具体的指導の中に組み入れることはできません。私がスポーツ領域におけるいくつかの論述に基づいておこなった概念整理から、次のように規定しておきたいと思います。

戦略とは、個々のゲームに規定されない、長時間あるいは長期間にわたるスポーツ活動全体を見通した計画である。

戦術とは、ゲームの中でそれぞれのプレーの局面を効率

的、合目的にプレーするために、競技の実際から経験的に得られ一般化された理論である。

作戦とは、そのときどきのゲームにおいて、個人的、集団的戦術を組み合わせ、戦略の実現に向けてどのように戦うかという方策であり、戦術を戦略へと不可分に結び付ける。

これを図示したのが、図1です。

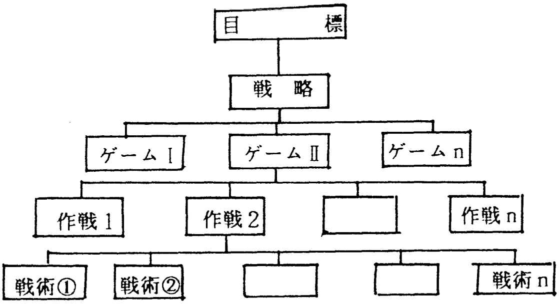


図1　戦略―戦術―作戦の関係

戦略・戦術の学習過程　前述の概念規定をもとにして私案ながら、戦略・戦術の学習過程のモデル化を試みたのが、図2です。この学習モデルは、(1)戦略の決定　(2)戦術の学習　(3)作戦づくり　(4)評価―フィードバックの四つの局面によって構成されています。（紙面の関係から、ここでは学習モデル図の紹介にとどめます）

実践の具体的内容

この実践は、女子四十四名のクラスによるサッカーの授業です。前述の戦略・戦術の学習モデルをもとにしながら年間を、

前期…勝負にこだわらず、いろいろなことを試みる。

後期…勝負にこだわり、そのための作戦づくりをする。

と二期に分け、サッカーに関する理論的学習（資料②）を位置づけ、年間授業計画を作成しました。（資料①）

計画のポイント

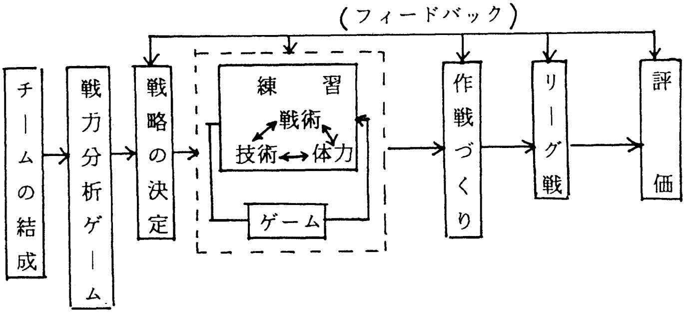


図2　戦略・戦術の学習過程モデル

オリエンテーション

オリエンテーションは、二回実施します。一回目のオリエンテーションでは、資料①の年間授業計画表を学生たちに示し、授業のねらいや内容についての全体像を理解させます。後期の最終リーグ戦での勝利をめざして、前期と後期の二期に分けてそれぞれに具体的目標を設定し、それに基づいて作成されている計画であることを確認します。

二回目のオリエンテーションは、こちらで振り分けた仮のチームによる「ためしのゲーム」を行ったあとで、今後そのチーム編成で取り組んでいくか否かについて了解をとります。これは、チームが競争していくためにその前提である平等な環境でできる限りスタートさせること意図したものです。そのために、ビデオ撮りした「ためしのゲーム」を見せて検討させます。チーム確定後、チーム内の役割分担及び練習内容の作成の作業をさせます。なお、毎時間十一人対十一人のゲームを設定します。

資料①

一九九一年度　体育実技（サッカー）年間授業計画

〈前期の目標〉

●自分たちで課題を設定し、練習計画を作成・実践する。⇩学習活動として「練習―ゲーム―ミーティング」の流れを定着させる。

●いろいろなポジションを経験する。⇩各ポジションの特性を知るとともに、ポジション確定のための情報を収集する。

1、4／13　オリエンテーション①（授業の目標と内容の紹介等）
2、4／19　ためしのゲーム（仮のチーム編成によるゲーム）
3、4／26　オリエンテーション②（自分たちのゲームのビデオを見て）
　●チームの決定及び役割分担・練習内容の作成
4、5／10　練習①　※●毎時間ゲームを実施
5、5／17　練習②　●雨天時にサッカー講義を実施
6、5／31　練習③　●「だんご」の克服
7、6／7　練習④
8、6／14　前期リーグ戦①
9、6／21　前期リーグ戦②　※●ゲーム分析の実習
10、7／5　前期リーグ戦③
11、7／12　前期修了レポート作成

〈後期の目標〉

●作戦づくりをする。⇩自分たちのチームの戦力分析及び相手チームの戦力分析をし、リーグ戦での各ゲームの作戦をたてる。●ポジションを確定する。⇩自分たちのチームの力が最大限発揮できるよう各人の特徴を生かしながらポジションを確定する。⇩作戦とからんで。●後期リーグ戦は、勝負にこだわって。

1、9／20　久し振りゲーム

2、9／27　後期練習計画づくり
3、10／11　練習①
4、10／18　練習②
5、10／25　練習③
6、11／8　練習④
7、11／15　練習⑤

※●毎時間ゲームを実施
●戦力分析の為の資料収集
（自、相手チーム）
●「死角」からの脱出

8、11／22　ミーティング（相手チームの戦力分析・作戦づくり）
9、11／29　リーグ戦①
10、2／6　リーグ戦②
11、12／13　リーグ戦③
12、2／20　修了レポート作成

資料②
サッカー講義の内容

1、サッカーの歴史　●起原　●「マス・フットボール」⇩「ストリート・フットボール」⇩「空き地フットボール」⇩「校庭フットボール」
2、サッカーのルール
●ルール史　●十七条のルール　●オフサイドとは　●文化とルール（イギリスとアメリカ）
3、サッカーの戦術
●戦術史　●戦術　①原則（私案）　②「ペレ」「マラドーナ」から学ぶこと　●ゴールキーパーの意味
4、サッカーの用具　●用具史　●ボールの変遷
5、審判　●審判の役割　●審判史
6、サッカー事情
●新聞の切り抜き、雑誌（サッカーマガジン他）より
7、その他
●ゴールの意味　●サッカースタイルが物語ること　●「PK戦」と「引き分け」　●時間かせぎ　●フーリガンｅｔｃ。

前期の戦術的課題

前期では、サッカーの初歩的なゲームで見られがちな「だんご」状態（ボールに群がる状態）の克服を、戦術的な課題としました。特にこうすべきだという指導をせず、各チームごと自

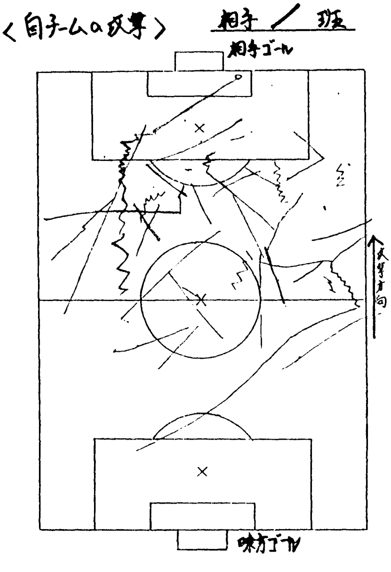
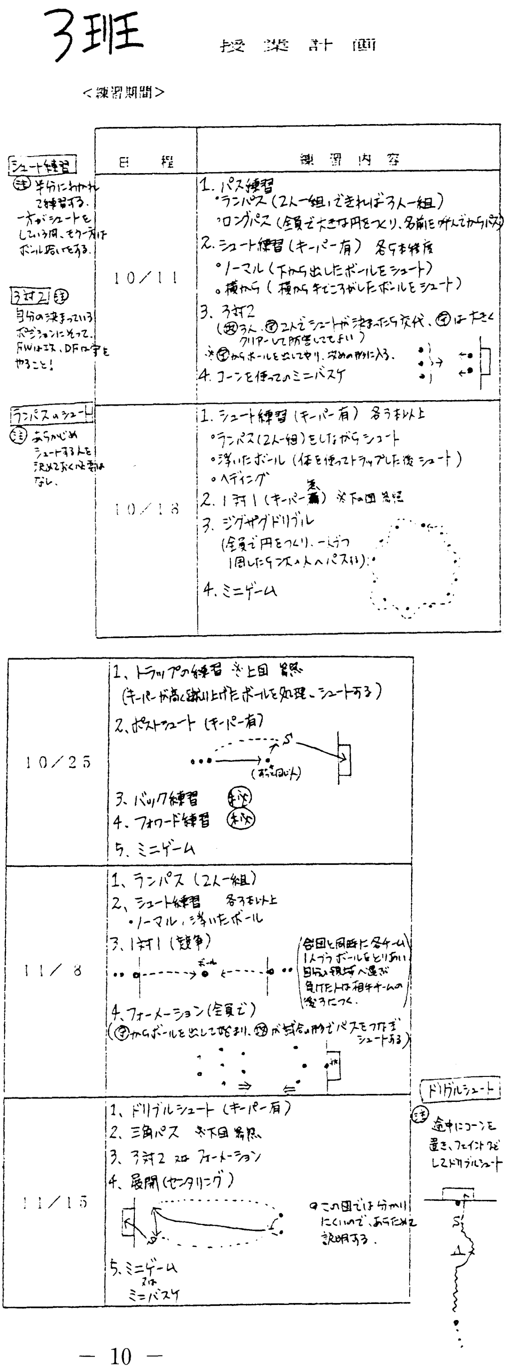


図3

分たちでミーティングの中で話しあわせ考えさせるようにしました。

学生たちからは、「もっとまわりを見よう」「声をだすように」「まわりから指示を出そう」などの意見が出され、練習課題として掲げられていましたが、具体的な練習内容を準備し、取り組むところまでには至りませんでした。チームを半分に分けてボールキープしながらパスまわしをするといった練習がなされていたぐらいです。ただまわりからの指示の徹底やポジションについての理解の深まりによって、徐々にではありますが、「だんご」状態が克服されていきました。途中、図3のような味方のボールの軌跡図を記録することで、コートの使い方を分析するように指示するとともに、攻撃のポイントとして軌跡図の中に「横パス」の出現が鍵となると指摘しました。

資料③


3班　授業計画

＜練習期間＞

日程	練習内容
10／11	1. パス練習 ・ランパス（2人一組、できれば3人一組） ・ロングパス（全員で大きな円をつくり、名前を呼んでからパス） 2. シュート練習（キーパー有） 各5本程度 ・ノーマル（下から出したボールをシュート） ・横から（横から手でころがしたボールをシュート） 3. 3対2 4. コーンを使ってのミニバスケ
10／18	1. シュート練習（キーパー有） 各3本以上 ・ランパス（2人一組）をしながらシュート ・浮いたボール（体を使ってトラップした後シュート） ・ヘディング 2. 1対1（キーパー無） 3. ジグザグドリブル 4. ミニゲーム
10／25	1、トラップの練習 2、ポストシュート（キーパー有） 3、バック練習 4、フォワード練習 5、ミニゲーム
11／8	1、ランパス（2人一組） 2、シュート練習 各3本以上 ・ノーマル、浮いたボール 3、1対1（競争） 4、フォーメーション（全員で）
11／15	1、ドリブルシュート（キーパー有） 2、三角パス 3、3対2 or フォーメーション 4、展開（センタリング） 5、ミニゲーム or ミニバスケ

ゲーム分析

味方ボールの軌跡図だけでなく、「ゲーム分析法」の資料に基づいていくつかの各分析方法を紹介し、それぞれのチームで実践することとしました。そして、チームで継続しておこなう分析方法を決定します。

後期練習計画づくり

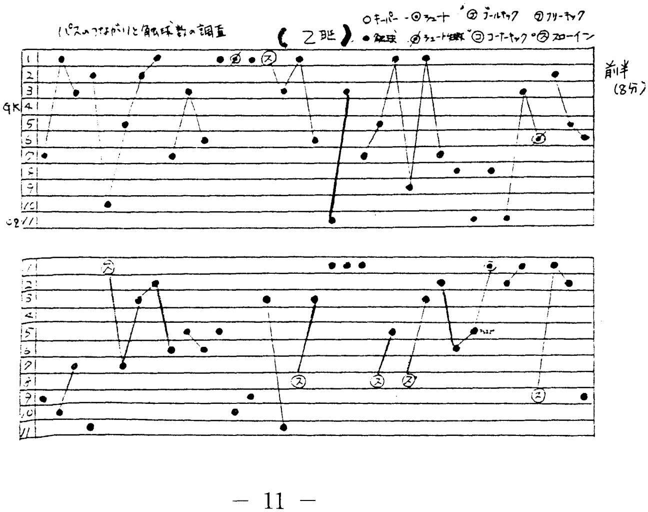
資料③は、三班が後期の練習計画として作成したものの一部です。前週の「久し振りゲーム」によって夏休みのブランクから授業感やゲーム感を取り戻し、前期修了レポートをもとに前期の取り組みを参考にしながら、後期最終リーグ戦に向けて練習計画の作成をおこないました。また、作戦づくりにおいて不可欠な自チーム及び相手チームの戦力分析の方法と作戦のたて方を提示し、練習期の毎試合の戦力分析のための資料収集をおこなうように指示しました。資料④は、授業時に資料として提示したものの一部です。

後期の戦術的課題は「死角」(相手の影に隠れてパスがもらえない状態)からの脱出とし、ボールのもらい方として、守備の人の影に隠れない位置に移動してボールを受け取るということを課題としました。

作戦づくりミーティング

前掲の毎時間記録された戦力分析結果に基づいて、これから戦うリーグ戦での各チームに対する作戦づくりをおこないます。四つのチーム編成ですから、資料⑤のような作戦表が三つ作成されるわけです。相手チームの戦力分析に基づきながら、今までの学習の成果をもとにして、誰がどこのポジションにつけば個人としてチームとしていちばん力が発揮できるか検討し、対戦チーム固有の作戦づくりがなされます。実際、作戦として

資料④　3班の分析方法



は物足りない部分もありますが、資料⑤の前半リードされた場合とリードしている場合によってシステムにバリエーションをもたせているところなどは、工夫されていると言えます。（後期から各人のゼッケン番号を固定し、記録しやすいようにしています）

修了レポート

年間を通してサッカーという一つの教材（種目）に取り組んだことを自ら確認するとともに、それを評価の中心に位置づける意味から修了レポートを作成させます。通常、実技のテストを実施し、技能の習熟の程度によって評価される場合が多いように思

資料⑤

どの班も、力に差はありません、では、どうすれば勝てるのでしょうか……。

2．自チームのとる作戦！… 相手チームの戦力分析に基づいて自分たちのチームがとるべき作戦は

気を付ける事

- ○ボールにかたまらないようにする。
- ○スローインに注意（縦に出す）
- ・ゴールキック…落ち着いてから、あわてないで！
- ○声を出して元気よくプレーする。

前半に攻めまくって先取点を取る（2点とれれば上出来）
後半はその得点を守るために
ディフェンスを固める
（キーパーチェンジをする）

3．作戦を成功させるために

1）システム

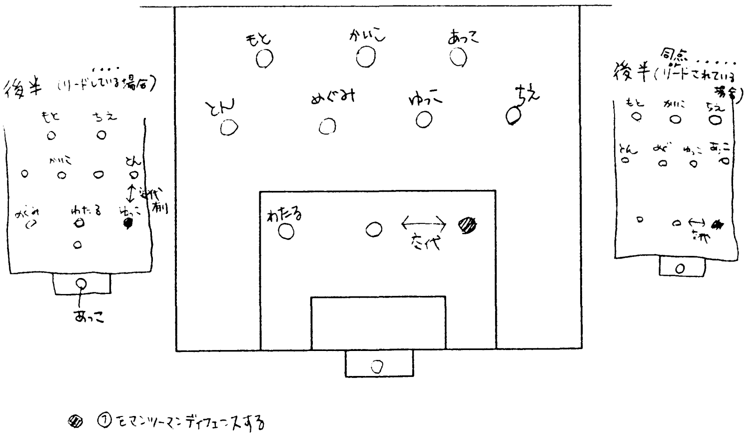
ゼッケン①の人はマンツーマン（彼女はよく動くためマークするのは大変かもしれない。途中で、ディフェンスの人たちの中で交替してマークするといいかもしれない。大変なポジションだけど、みんなが嫌がるポジションだけど、勝敗にとことんこだわって……。）

2）その理由・意図

シュートを狙うのは ほとんど①だから、彼女さえマークすれば何とかなるかもしれない。
but、⑮と⑥も動きがいいので注意する

《勝つポイント》1. 今日の試合に勝てば、リーグ戦優勝の可能性は大きくなります。そんなわけで、皆なそれを意識して緊張しましょう。
2. 相手チームよりも元気よくプレーしましょう。3班ならではの明るさで相手チームを圧倒しましょう。
3. 審判には忠実に、下品な言葉を発しないように…ネ！

3．ポジション



われますが、私の場合は、修了レポートの内容及びグループ・ノートの活用に基づくチームの取り組み状況によって評価しています。修了レポートの作成にあたっては、毎時間作成しているミニ・レポート（今回は後期分のみ）と前期修了レポートを返し、それらをもとにしながら、最終の授業時に九〇分かけて作成させます。

修了レポート内容は、

①一年間の授業を通して、a自分のプレーについて、bチームのプレーについて成果・課題について分析しなさい。

②チームとしての取り組みはどうであったか。自分たちのチームや個人の力が向上し、生かされるように練習計画、ポジション・システムの決定、ゲームの反省・ミーティングを行うことが出来たか、チームの一員としての取り組みを含めて書きなさい。

③後期最終リーグ戦を戦って、自分たちのチームの試合結果について、何故そのような結果になったのかを分析しなさい。勝敗だけでなく、試合の中身についても自分たちが思うような戦いができたか、できなかったか、それは何故か、相手チームの戦力を分析し、自分たちで「作戦」をたてることに意味があったか、について書きなさい。

④この授業を通して、「スポーツと競争」について思うこ

資料⑥

③後期リーグ戦を戦ってみて。

「作戦」を自分達でたてることは、とても意義のあることだと思います。自分を分析することは、チームの弱点を知る要だし、チームの分析をすることは、個人の甘さと弱点を補ってくれるものだから…。また相手チームを分析することは、サッカーをする自分達自身を客体化し、客観化することだからだ。得るところはたくさんある。人のプレーをみて、わかって、はじめて自分のプレーが見れるし、わかると私は思う。

試合の中でいかに作戦を実行するかは、他チームの試合を見ながら、相手チームの分析をしながら、どれだけ、頭の中にイメージし、どれだけ現実にちかいシュミレーションゲームを構成できるかだと思います。

（K・M）

資料⑦

④「スポーツと競争」について。

個々人が、今の自分をのりこえて自己に勝つこと、そして常に目標は自分自身であることでした。

スポーツって点のとり合いだけど、それだけじゃないことも覚えた。競争って、嫌なイメージが多いけれど、目標があって、それを克服することだって競争だと思う。だから、いかにサッカーの基本を体に覚えさせるか、を目標にした。

相手チームと競争することで、チームは向上する。競争と競争の結果によって、チームは、弱点をみつけ、良い所を実感する。これってすごいことだと思う。他人を蹴落とす競争は嫌いだけど、自他共に向上する競争は好きだ。そんな要素をもったスポーツは偉大だと思う。だからスポーツってやめられない。テストとかの競争の要素を含むものだったら、人はスポーツしないと思う。大学で新しいスポーツに出会えたことを嬉しく思っている。

（Y・A）

とを書きなさい。
⑤授業の感想を書きなさい。
以上の五項目です。

実践を終えて

全体的には、資料⑥⑦のようなレポートが多くみられました。初めてサッカーボールを蹴る学生がほとんどでありながら、戦略・戦術指導を組織していくことが可能であるという手ごたえをつかむことができました。しかし、今後に向けて、いくつかの課題を指摘しておきます。

①各チームは、それぞれの練習計画に基づいた独自の学習を展開しており、かなり学生の主体的取り組みがなされていました。しかし、グループ・ノートがもう少しうまく活用され、教師の指導・助言がタイミングよく提示されれば、学習がよりスムーズに展開され、深まったように思います。

②学生たちに学ばせるべき「戦術」の内容は、「だんご」及び「死角」の二点を強調するに留まりました。ゲームに生きる戦術内容を系統的に整理し、具体的にどのように学生に提示していくかは、さらに検討の必要があります。

③「サッカー」というスポーツ（文化）をトータルに学習するというねらいから、サッカーの歴史やルール史などの「サッカー講義」を位置づけました。これを雨天時の裏番組としましたが、一定の時間を確保して計画的に行なうべきでした。

④私は、技能テストやゲームでのプレーを評価せず、授業での個人・チームとしての取り組みを基にしたレポート試験を中心にしています。技能の習熟程度を、どの程度組み入れるべきか否かについては、検討の余地のあるところです。

おわりに

私を含め、体育領域の大学教員は、研究第一主義の姿勢が強く、教育者としての役割を十分果してきたと言えないように思われます。大学でしか学ぶことのできない体育授業を実践していく使命が、体育教員にはあるように思います。

私は、授業研究・スポーツ研究に携わっているため、健康や体力の観点からの体育授業について言及できません。私の立場からは、スポーツについての教養を身につけ、スポーツという文化をその時代に生きる人間として、継承・発展させていかなければならないと考えています。